



郡山に消ゆ

東北新幹線を降りて郡山の駅ホームを出ると、いまにも泣き出しそうな空だった。

この薄暗い見知らぬ土地で、あの伯母は逝ったのだ。

重い荷物を構内のロッカールームに預け、わたしは郡山駅前の石畳をぐるりと歩いた。

都会の暮らしに浸かり、エスティ・ローダーの化粧品じゃなければいやだと澄まして語った伯母は、この駅前のどの建物でエスティ・ローダーを買うことができただろう。

携帯電話をかざし、灰色の駅をパシャリと撮った。

伯母の葬儀が終わったら、おそらく二度と来ることはないであろうこの土地を、きちんと焼き付けて置こうと思った。

記憶なんてあてにならない。うつくしく劣化してしまうから。だから写真にちゃんと撮る。

喪服のワンピースは夏物だった。冬の郡山を歩くにはすこし寒い。

タクシーを呼び、メモ書きを読み上げて葬儀場を指定した。

無口なドライバーは車を急発進させる。灰色の空に、その無口さが異様に似合う。これが北国なのだろうか、と偏見を傾けながら、窓の外を流れる景色を無心で眺める。

自動車は大通を抜け、寒々としたコンクリート塀の住宅街に行く。

母が語っていた伯母の家は、どのあたりなのだろう。

「ユミ姉ちゃんにしてはねえ、とても地味なの。地味な家だったのよ。なんだか薄暗くてね」
関西でデザイナーをしていた、派手だった伯母。

タクシーは少しもスピードを緩めることなく、目の前に唐突に現れた葬儀場に突っ込んだ。

玄関にたむろしている喪服の群れが、一斉にこちらを見る。

わたしは無言のドライバーに、メーター通りの金額を支払って車を降りた。

ドライバーは釣り銭をわたしながら、はじめて「どうも」と声を出した。

玄関の群れは、知らない人たちばかりだった。

自動ドアをくぐると、先に来ていた母がわたしを見つけて駈けてくる。

「わざわざ来なくてもよかったのに――」

母に言われて、わたしの感傷は途端に破られた。

「ん。でも、ユミ伯母さんには世話になったしね」

「そうお？いいのよ、べつに。新幹線代だってバカにならないし」

父が間に割って入った。

「まあまあ。疲れたろう。昨日の通夜は雨でね、寒かったぞお」

「告別式は二時半だよな？」

わたしは腕時計を光にかざしながら尋ねる。

父はうなづく。

「あと十分ぐらいだな」

わたしはやっと、コートを脱いでいないことに気づき、あわてて脱ぐと周囲を見渡した。

橙色のロビーでは、十人足らずの男女が告別式を待っていた。

ロビーの向こうの小さな部屋には、パイプ椅子に数名がかけているばかり。

こぢんまりした式になりそうだった。

コートを父に預け、受付で香典を出して記帳を済ませる。

太いフェルトペンに白い帳面。

この瞬間にいつも、わたしは葬儀という異世界に舞い込む。

黒と白とよそよそしい会話と...何度立ち会ってもふしぎな世界だった。

数分もすると、葬儀が始まった。

わたしは父の隣にかけろ。

しずしずと袈裟の宗教家が入ってきて、ゴーンと鐘を打ち鳴らす。

握る数珠の感触が冷たい。

線香の煙がゆらゆらと揺れる。

棺桶の上の写真は、伯母の晩年のものだった。

パリッとしたデザイナー時代ではなく、動物愛護の世の流れで毛皮デザイン部門がリストラに遭い、小さな会社を転々としながら精神を病んでいった伯母の、最後の時代のほほえみだった。

写真の中の彼女は、コンクールで金賞を取ってフランス滞在までしたデザイナーの青柳ユミではなく、経済的な問題で離婚した夫とヨリを戻すことでしか生活を支えられなかった、ただの東北の主婦のユミ伯母さんだった。

それでも彼女は、最後まで高い化粧品を使い、精神を病みながら海外旅行を企て、オペラ歌手の追っかけをやめなかった。

読経は続く。

焼香が始まった。

参列者はわたしを含む親族が十二人、近所のよしみと思われる年配の女性が数名だった。

親戚方は、伯母の栄光の昔と晩年の奇行を知るだけに、一様に難しい顔だった。

いまはその死を、ただ悼むのみ――。とはいえ、伯母の晩年は悲劇と喜劇のないまざった、平凡なわたしたちには受け止めるに困難な生活で、どうにも複雑な気持ちなのだった。

焼香の順番はすぐに回ってきた。

わたしは伯母の棺桶を囲むように林立する銀色の蓮を見上げ、つぎに伯母の写真を見た。

感傷はなかった。

焼香し、頭を下げる。

人の列が動く。

読経が終わると、伯母と再婚していた伯父が、立ち上がって演説を始める。

「ボクはねえ、彼女と出会ったとき、仏様のように感じたんですよ。なんだかパァーッと光が射してね、仏様のようにだったねえ、うんうん」

しみりした調子ではない。

合コンで彼女を自慢するような調子だった。

部屋を奇妙な静けさが支配する。

伯父の滑稽な演説は十分余り続いた。参列者への礼の言葉など一言もなく、自分の気持ちを垂れ流すようにしゃべっている。

彼が作った借金を、伯母はどれだけ苦勞して返したことか。

癌に冒され、精神を病んだ晩年の伯母を引きとったのは、彼だったという事実...伯母はどう思っていたらう。

伯母は愛していたのだろうか。

容姿以外に取り柄のない、この男を。

花を大量に棺桶に投げ入れる。

葬儀が終わると、「近所の義理」で来た婦人たちは、「まだ六十歳になったばかりですってねえ」

「残念ねえ」

と、ちっとも残念そうじゃない声で言って帰っていった。

二年の郡山の生活で、伯母はどれぐらい人間関係を作れたのだろう。

伯父の母親が来ていた。

わたしと両親は、白髪に口紅の大柄な伯母の義母に挨拶をした。

「どうも。このたびは...」

「ご愁傷様でしたわねえ。発病してあつという間で」

女性はホホホと口に手を当てて微笑する。

さっぱりとして押しが強い。わたしが知らない人種だった。

「わたくしの家に来た時ねえ、フォークを振り上げて殺すぞ！って叫ぶんですのよ。わたくし、怒っちゃって、息子には二度と連れてくるなと言っておいたんですけど。思えば病気のせいだったんですわねえ」

わたしも両親も、返答に困って押し黙った。

「なにか、愛されている人が大阪にいるとか言って、息子を放り出して新幹線に乗って突然関西へ行ったりしたとか」

「.....」

「脳に腫瘍があったせいなのねえ、それも。ホホホ。わたくし誤解していて。ホホホホ」

黙って頭を下げるしかなかった。

帰りのタクシーのなかで、ぽつりと母が言う。

「ユミ姉ちゃんは、まともよ。とてもしっかりした、まともな人よ」

父は何も言わなかった。

わたしも言えない。

伯母の言動は明らかに精神疾患を抱えた人間のそれだったなんて。

母は見ない。

暗いものや病んだものなど、見たくないものは見えない。

わたしには確信があった。

母もいつか...「奇行」を持つようになるだろう。

祖母の晩年もおかしかった。

母もいつか...そしてわたしも...

誰も何も言わなかった。

郡山の駅前でタクシーを降りると、母がつぶやいた。

「雪だわ」

わたしが結婚することを、久しぶりに会った両親に告げることは、ついにできなかった。

郡山に来て手にしたのは、郡山駅の写真と「ゆべし」という名物菓子。

「じゃあね、たまには遊びに来たらいいわ」

たまには帰ってきたら、ではなく「遊びに来たらいいわ」。

母が手を振っていた。

わたしね、結婚するのよ。

言えない言葉を飲み込んで、改札で別れた。

新幹線を待ちながら泣いた。

同じ方角に帰るわたしたちは、違う車両に乗る。

寒い。

心に今日も霧雨が降る。